



心 と 精 神 (2)

新潟市医師会

山 本 保

資料が手元になく詳細に記せないのですが、はっきり記憶していることがあります。東大脳神経内科出身の東女医大の岩田誠教授が脳生理学（とくに小脳）の大家 I 教授に噛み付いたことがあります（多分 中央公論）。I さんは心と精神をごっちゃに用いている、というのです。岩田氏の考えは明解で、心とは個々それぞれがもつものであり、精神とは脳の機能である、という意見です。これをごっちゃにすると、それぞれの語意が減弱してしまうということだと思います。

そして、岩田氏は芥川龍之介の作品「手巾」を例にあげています。息子を亡くした母親が恩師宅へお礼に行った。テーブルに向きあい、テーブルの上の母は、きわめて冷静に礼儀正しくお礼を述べていたが、テーブルの下ではハンカチが千切れんばかりに手をにぎりしめていた、という小品です。つまりテーブルから上が精神、下が心という解釈です。

西研教授（昭和32年生れ）は東大大学院修了後、ずっと私学で哲学を講じ、多くの著作を発表してきた人です。NHK の「100分 de 名著」シリーズではカント、ヘーゲル、ニーチェを担当しており、私は多くのことを学びました。ニーチェはアンコール放送されました。

精神を考える場合、ヘーゲル（1770～1831）の「精神現象学」をとり上げなければなりません。西研氏は次のように説明しています。どんな人の意識もその時代の人々の価値観や社会制度（＝時代の精神）とつながっている、と考えています。つまり、ヘーゲルは古代ギリシャ、ローマ、封建時代、絶対王制、フランス革命とさまざまな「時代の精神」を、社会制度を含めた具体的な「現象」として叙述していきます。一切の物事を、人間精

神の歴史的な具体的な現象の「現れ」とみなして描くということで「精神（の）現象学」という表題になるわけです。そして、ヘーゲルは「精神」の歴史の大きな流れは、人が自分だけの自由な内面をもたず、ただ共同体のなかで役割を果たして生きていた段階（古代ギリシャ）から自分だけの内面を自覚することで個人と社会とのあいだが疎遠なものになってしまう段階（ローマ帝国からフランス革命まで）、さらに個人が自分のなかで他者や社会との関わりの大切さを自覚する段階（カントの道徳思想と良心）を経てきたと述べています。

長い間、私が不思議に思ってきたことがあります。それは漱石は、なぜ生涯自己分析や「自己内対話」のような生真面目な作品を書きつづけたのかということです。もともとデリケートで真面目な人ですし、さらに留学させられ、英国と世界を知ってしまった漱石です。しかも明治の大変革期です。「時代精神」と「心」の難問に生涯向きあいました。

平成28年、赤木昭夫氏の「漱石のころーその哲学と文学」（岩波新書、2016）が出版されました。赤木さんの名はNHKの解説委員であったので知っており、頭のきれいな人だと感じました。「赤木さんのお遊び」かと思い、買ったのに読まないで本棚に並べました。背表紙だけ毎日見ていましたが、88歳になり、漱石と子規の友情について考えていた時、なぜか赤木さんの本に手がとどきました。読み出してすぐ目が覚めました。副題が小さい文字であったので軽視した私のいつもの愚拙です。赤木さんの探求は見事なものです。なぜ今までに多くの漱石研究者たちが指摘しなかったのかについて赤木さんは「彼らには能力が欠けてい

た」と一刀両断です。

漱石は、まわり道をして23歳で東大英文科に入学し、入学早々から狩野亨吉（1865～1942）らの哲学研究グループに入ります。最初は哲学の試験対策ぐらいの軽い気持ちだったらしいのですが、狩野に魅せられて深入りしていきます。赤木さんは「漱石の一生を決定づけた最重要人物は、妻の鏡子を別にすれば、間違いなく狩野だった」と言っています。わずか2歳年上の狩野を最高の師と仰ぐところが漱石の美点、徳であると思います。

以下は赤木さんの解説です。

大正元年（1912）から4年（1915）にかけて、漱石は4作を発表し、その中の一つが「ころ」である。この時期、日本ではベルグソンの哲学が大流行した。それは、ウィリアム・ジェームズの1909年の連続講演「多元的宇宙」において激賞を受けたのを契機に日本でもベルグソンが注目され、ジェームズとともにベルグソンも迎えられた。

このことを知った漱石は、その喜びを次のように語っていることを赤木さんは雑誌（私のメモ不足で雑誌名が記してありません）の論文で紹介しています。

「余はあながち弁証法を嫌ふものではない。又妄りに理知主義を厭ひもしない。たゞ自分の平生文学上に抱いている意見と教授の哲学に就いて主張する所の考えとが、親しい気脈を通じて彼此相倚る様な気持ちがしたのを愉快に思ったのである。とくにベルグソンの説を紹介する辺りを、坂に車を転がす様な勢で駆け抜けたのは、まだ血液の充分通ひもせぬ余の頭にとって、どの位嬉しかったか分らない」。

私は執着心が強いので「ころ」について、二つ疑問をもっています。一つは、なぜ平仮名の「ころ」を題名にしたのかということです。このことは「私の個人主義」につながると思いこだわっています。もう一つは、あとがきに記した過剰と思われる自信を朝日新聞ではなく、「時事新報」などで自作を宣伝していることです。不思議を考えつづけたいと思います。私のこだわりは異常でしょうか。

フロイト（1856～1939）はベルグソンと同時代を生きた人ですが、哲学には全く関心がなかったといわれています。目前の一例一例の患者さんに集中していたのだと思います。その中から人間の「ころの構造」を構想しました。人間の壊れた本能の代わりに備わったのが「ころ」であり、ころは「意識」と「無意識」に分かれ、さらにそこに「自我」が生れたと考えます。自我は「これが私である」と思っているもののことです。そして生れつき人間に備わっているものではなく、成長する過程で作上げていくものです。初期のフロイトは、ころは「意識」「前意識」「無意識」の三つの領域からなると考えましたが、その後修正を加えて、「自我」「超自我」「エス」の三つからなると考えるようになります（以上は鈴木晶教授の解説を参考にしています）。「ころの構造」を考え、個々の患者さんのころを分析していくことを「精神分析」といいますが、フロイトの原著名は「PSYCHOANALYSE」ですから、「ころの分析」と訳す方がよいと思います。フロイトの最大の功績は、なんといっても無意識の発見だと思います。

小林秀雄さんの最後の作品は「本居宣長」でした。小林さんによると「大和心」を日本ではじめて使ったのは赤染衛門で、「大和魂」は紫式部だそうです。それから400年経って宣長の登場です。小児医療をしながら30年もかけて『古事記』を読み解き、『源氏物語』の心（もののあわれ）を探究した宣長。その「心と精神」に、小林さんは挑んだのだと思います。宣長には、自己の心とともに「無私の精神」があると強調しています。そして、「無私の精神」とは、やろうと思わなければ出来ないことだと述べています。「感動とイメージーションの人」（尊敬の念をこめて私がつくったことばです）小林秀雄さんはすごい人です。

小林さんに「漱石論」がないのを不思議に思っていたのですが、漱石がベルグソンに関心を持っていたことを知り、ベルグソンに没頭し「感想」を書いたのではないかと深読みをし楽しんでいます。どんな場合でもきっかけというのは大切なものだと思います。